

専門論文

スピリチュアル・ツーリズムをめぐる近年の諸論調

—スピリチュアル性と観光性との関連を中心に—

Understanding the theories on spiritual tourism: Spirituality-oriented and sightseeing-oriented tourisms

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学客員教授、名誉教授

キーワード：スピリチュアリティ、スピリチュアル・ツーリズム、宗教的ツーリズム、観光志向的ツーリズム

Key Words : spirituality, spiritual tourism, religious tourism, sightseeing tourism

Abstract :

This paper engages with the contemporary problems of spiritual tourism, which includes the traditional parts of pilgrimage and the modern parts of sightseeing tourism, arguing this dichotomy has been encouraged by the economic development due to the progress of social productive forces in order to promote the modernization of sacred sites and the contemporary spirituality-oriented tourism.

I. はじめに—本稿の課題

1. スピリチュアル・ツーリズムの概念規定

ここでスピリチュアル・ツーリズム (spiritual tourism: 精神陶冶主義的、世俗脱却主義的なツーリズム) とは、宗教的あるいは精神陶冶主義的な施設を訪れ、参詣的な行為をしたり、心身鍛練的な行為することなどを、少なくともツーリズムの1つの要素としているもの、もしくはそうした行為に関連したツーリズムをいうが、多くの場合、実質的には宗教的 (religious) ツーリズムと同義とされているものである。例えばドウソン (Ruth Dowson)、ヤクブ (Jabar Yaqub) およびライ (Razaq Raj) の編書 (Dowson, Yaqub and Raj (eds.), 2019) をみると、書名は“*Spiritual and Religious Tourism*”となっており、“スピリチュアル・ツーリズム”と“宗教的ツーリズム”とは区別されない単一なものとしてい

る。この「スピリチュアル・ツーリズム=宗教的ツーリズム」という規定は、注目されるべきものである。その場合、本稿筆者では、まず、“スピリチュアル・ツーリズム”と“宗教的ツーリズム”とは範疇が異なる概念と考えるべきものとしている。というのは、“宗教的ツーリズム”は (例えばビジネス・ツーリズムなどと同様な) ツーリズムの具体的実行形態の1つであるが、“スピリチュアル・ツーリズム”の場合におけるスピリチュアル性は、例えばツーリズムの金銭性や観光性などと同様な、ツーリズムの性質に関わる特性 (要素) の1つで、ツーリズムの質を示すものであるから

である。

しかしこのことは、「スピリチュアル・ツーリズム=宗教的ツーリズム」というテーゼが、スピリチュアル・ツーリズムの論究に有益なものであることを否定するものでは毛頭ない。以下本稿論述ではそれを出発点のテーゼとし、さしあたり、スピリチュアル・ツーリズムはなんらかの意味で宗教的ツーリズムでもありつつも、それから独自の (例えば、観光志向的) ツーリズム形態に進展、変化するものがあることを問題意識とするものである。

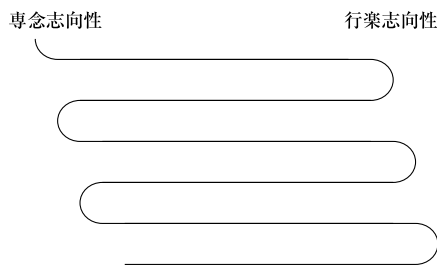
そこで、まず、スピリチュアル・ツーリズムという点を取り上げる。この場合、“spiritual”という言葉は“spirit”の派生語であるが、“spirit”は語源的にはラテン語の“生きるための力 (force)、すなわち生存するための力”を意味する言葉“spiritus”から来たもので、“spiritual”も、本来は、単に“精神的なもの”をいうだけのものではなく、“生きる力の根源的なもの”という意味のものと解されている (Güzel and Sariyildiz, 2019, p.42)。

スピリチュアル・ツーリズムそのものについてみると、例えば、前記のドウソン/ヤクブ/ライ編書の編者3名の執筆にかかわるいわば同書序章にあたる「第1章 スピリチュアル的かつ宗教的な旅行のいくつかのもの (journeys) のための序言」(Dowson, Rai and Yaqub, 2019, p.1ff.)をみると、次のような記述がある。

すなわち、まず「宗教的ツーリズムと巡礼に関する国際会議」(The International Religious Tourism and Pilgrimage Conference) が2003年以来行われていることが紹介され、同会議の2017

年大会の成果などをふまえて、総括的にいうと、スピリチュアル・ツーリズムは、“専念性重点的なもの”（専念志向者：worshipper）と“行楽性重点的なもの”（行楽志向者：tourist）とに大別される。

しかし、両者の間には程度において差のあるものがあるかあり、結局それは、“専念志向性——行楽志向性”を両端とする連続的關係の中にあるもの（continuum）として示される。ただしこの場合、この連続的關係は1回限りの静的なもの（static）なものではなくて、図1のように両極点の間を行き戻りしつつ展開する動的なもの（varying）としてとらえられるべきものとされている（カッコ内は本稿執筆者のもの、以下同様）。



出所：Dowson, Rai and Yaqub, 2019, p.4.

図1：スピリチュアル・ツーリズムにおける専念志向性と行楽志向性の連続的關係

次に、宗教的ツーリズムという点を見ると、例えば、トルコ、ムグラ・シキ・コクマン大学のアクブルト（Onur Akbulut）と、同じくトルコ、アクデニツ大学のエキン（Yakin Ekin）が、2019年、宗教的ツーリズムについて次のように定義しているものがある。すなわちかれらはそれを、「人々が自分たちの宗教的信仰心や他の信じることを示すために、通常的な居る場所以外の所に出向いて行方の際の、旅行および見聞（travelling and sightseeing）をいう」と規定している（Akbulut and Ekin, 2019, p. 164）。

ここでは、まさに宗教的ツーリズムについて、内容的に、単に「旅行」だけではなく、「旅行および見聞」とされていることが強く注目される。もとよりここで、「travelling and sightseeing」とされている場合の sightseeing とは、厳密には、原初的には当該宗教に直接的にかかわった事物（例えば仏教でいえば仏像や仏壇など）の sightseeing だけをいったものであろうが、しかし本稿筆者のみるところ、これには次のような事情が生じるものである。

それは、そうした sightseeing が進むと、sightseeing の対象がさらに広義のものに拡大されることである。まず（いわば第2段階として）上記の当該宗教的事物に直接かかわった周辺の事物（例えば仏壇室や建物としての寺院全体など）も対象になる。そしてそれが進むと、対象は（いわば第3段階として）さらに広義のものに拡大され、間接的に関連するだけのものも対象となる。さらに（第4段階として）（例えば旅行目的地に至る道中の主要な

“sights” が対象となり、その seeing も当該宗教的ツーリズムの一環というものになる。

ところがこの点はさらに進む。（以下の所論を先取りしていえば）、（第5段階として）当該ツーリズムの宗教性と直接的には関係のないもの、すなわち、そうしたツーリズムからいえば相対的に別のもの、すなわち、それから自立したところの、例えば人間の行楽地訪問欲求を充たすだけのようなものも含まれるものとなり、しかもこうした部分が大きくなる。つまり（これまで一般に）観光といわれてきたものになる。

ここにおいて注目されるべきことは、スピリチュアル・ツーリズムについてのドウソン／ヤクブ／ライの所論と、宗教的ツーリズムについてのアクブルト／エキンの所論とが、趣旨的には、基本的に一致していることである。そのエッセンスは、要するに、スピリチュアル・ツーリズムにおいても宗教的ツーリズムにおいても、（まとめて表現すれば）信仰性と観光性の並存性というテーゼにおいて、両者の並立の仕方、すなわち、重点の置き所のいかに変化し、結局、観光性が強くなると考えられていることである。

このことは、2つのことを意味する。第1に、「スピリチュアル・ツーリズム＝宗教的ツーリズム」というテーゼにたつ場合においても、信仰性と観光性との並存において、重点の置き所の異なるいくつかのものがあろうことである。ドウソン／ヤクブ／ライの所論で、“tourism” に代えて、というよりは、同一 “tourism” の中に、いくつかの “journeys” があるとされているゆえんである。

第2には、この分化がさらに進展し、これらの “journeys” がいわば自立し、それぞれが1つの “tourism” となることがあろうことである。これは、いわば “tourism レベル” における分化、自立化である。以下では、この点に視点を置いて考察する。

ちなみに、本稿で問題意識としているものは、この点であって、いわゆる「観光」概念の中には、（例えば公的機関の定義の中には）個人的あるいは業務上の用務に基づく旅行がある場合があることなどは、対象外のものとしている（この点については大橋, 2021 参照）。

2. スピリチュアル・ツーリズムの進展・変容

そこで、この点をさらに深めるために、もともとの「スピリチュアル・ツーリズム＝宗教的ツーリズム」のテーゼに戻って考察すると、このことを、宗教的ツーリズムについて、近年、改めて論じているものに、例えば2014年のクルマナリエヴァら（Kurumaniyeva et al., 2014）の論考がある。それによると宗教的ツーリズムも、内容的には“巡礼志向的ツーリズム”（pilgrimage tourism）と“観光・見聞志向的ツーリズム”（tourism of sightseeing-informative orientation）とに大別される（Güzel, Şahin and Yetimuğlu, 2019, p.98 から引用）。これは、（上記で断った）“tourism レベル”（以下では tourism を単にツーリズムもしくは人間旅行という）における分化であり、端的には（個人的あるいは業務上の用務に基

づくものなどは別にした) ツーリズムの2大種別論とっていいものである。

さらにこうした観点からすれば、アクブルト／エキンの所論も、こうしたツーリズムについて、大別的には次の3者の形のものとして示される3大種別論いうことができる。3者とは、①巡礼 (pilgrimage)、②宗教的ツーリズム (religious tourism)、③ (通常の) 観光的ツーリズム (tourism) である。この場合巡礼は“聖なるもの” (sacred)、宗教的ツーリズムは (宗義を中心にした) “知識ベースのもの” (knowledge-based)、(通常の) 観光的ツーリズムは “世俗的なもの” (secular) と特徴づけられている (Akbulut and Ekin, 2019, p.165)。

この上になつて次に、歴史的経緯・動向についてみると、例えばなんらかの形の宗教については、13万年以前～3万5千年以前に現われたものという見解があるが (Zuelow, 2016, p.3)、巡礼については、イギリス、セントラル・ランカシア大学のクラシ (Jahanzeeb Qurashi) のように、「巡礼という形における宗教的ツーリズムは、聖書やコーランよりも以前にすでにあった古いものである」 (Qurashi, 2019, p.87) と述べているものがある。

この場合巡礼について、その後の動向、特徴や位置づけをみると、注目されることに、巡礼は、サムプシオン (Sumption, J.) によると、すでに15世紀の終わりごろに、動機が“スピリチュアル”なものから、新規な場所訪問や経験を求める“好奇心” (curiosity) に変わったとされている点がある (Sumption, 1975, cited in Idris, 2019, p.61)。

この点について、さらに近年の動向についてみると、前記で一言したヤクブは、(上記とは別の) 単独論文で、詳しくは後述のように、直接的にはイスラム教のメッカ巡礼についてであるが、その動機 (motivation) には「巡礼から (単なる) 通常の観光的ツーリズムへの移行」の傾向がみられると指摘している (Yaqub, 2019, p.21)。つまり今日では、巡礼的な装いをし、巡礼的行程にあるものの中でも、実際には“通常の観光的ツーリスト”といわざるを得ないものが増えているというのである。

本稿筆者として、さしあたり以上をまとめて原理的にいえば、注目されるべきものとして次の3点があると考ええる。第1に、アクブルト／エキンなどのように、原基的には、人間ツーリズムの形態には3つのものがあるとされていることである。それは、巡礼、宗教的ツーリズムおよび通常の観光的ツーリズムである。これによると、(ここで前提にしている) 旅行形態は、もともと広く一般的には、これら3種に大別されることになる。

第2に、しかしこの場合、アクブルト／エキンでも、スピリチュアル・ツーリズムという点からいえば、巡礼により近いところの、“宗教性・スピリチュアル性の強いもの”と、“通常の観光的ツーリズムにより近いもの”との2方向に収斂するものとされている (Akbulut and Ekin, 2019, p.165)。これによれば、人間ツーリズム形態は、この段階でいえば、この2種のものに大別されうることになる。

ところがさらに進んで、第3に、巡礼においても“通常の観

光的ツーリズム”への移行傾向があるとされていることが強く注目される。つまり、これによれば、総括的には巡礼にも、かつ、宗教的ツーリズムにも、すなわち、すべてのいわゆる精神的な旅行の形態において、“通常の観光的ツーリズム”への傾斜傾向があることになる。

本稿筆者としては、今日における人間ツーリズムの全般的基本的傾向としては、この第3点は何よりもまず確認されるべきものと考ええる。ただしこの点は、本稿筆者としては、一般的かつ歴史的には、次のように理解されるべきものと考ええる。すなわち、社会における生産力の進展とともに、一般の人々の生活水準が高まって、余暇時間が増え、その利用の仕方が質的にも量的にも向上すると、スピリチュアル・ツーリズムにおいても、巡礼化の方向と観光重視的方向への分化傾向が強まり、そしてそれがさらに進んで、結局は、余暇時間を好きなように過ごす“通常の観光的ツーリズム”が盛況的なものになる。

この上になつてさらに、スピリチュアル・ツーリズム論の現在の動向に戻って考えると、既述のドウソン／ヤクブ／ライの編者3名による序章的論考では、スピリチュアル・ツーリズム志向的なツーリストは近年量的にとみに増加しているだけではなく、動機も多様化しており、質的にも従来のオーソドックスな範囲を超えるものとなっている。故に今日では、こうした動向を正しくとらえ、対処することが実践的にも必須な課題になっていると提議されている (Dowson, Rai and Yaqub, 2019, pp.1-2)。

ちなみに、これと同様な点を宗教的ツーリズムについて論じているものに、トルコのアクデニツツ大学のギュイツェル (Özlem Güzel)、同大学のサーヒン (İlker Şahin) およびトルコ、ネクメチン・エルバカン大学のイエッティモグル (Seda Yetimoğlu) がある。かれらは、歴史的にみると、宗教において宗義上相互に異なりたいわゆる流派というべきものが種々生成すると、1つ特定流派に帰依していることを自らにおいても確認して深化させ、それを示すために、その特定流派の事績のある所に参詣すること、つまり宗教的ツーリズムが盛んになると提議している (Güzel, Şahin and Yetimoğlu, 2019, p.97)。

すなわち、これらの所論では、集約的にいえば、種々な形における宗教的あるいはスピリチュアル的な運動が盛んにあると、一般にツーリズムといわれるものの発展がもたらされることが改めて提起され、今日においてスピリチュアル・ツーリズムについて論究する意義が指摘されている。

本稿は、以上のまえがきの諸テーゼの上になつて、ドウソン／ヤクブ／ライ編著 (Dowson, Yaqub and Raj (eds.), 2019) に所収の諸論考に依拠し、現在におけるスピリチュアル・ツーリズムに関わる若干問題について考察することを課題とする。ドウソンとライはイギリス、リーズ・ベケット大学所属、ヤクブはイギリス、シェツフィールド・ハラム大学所属である。

本稿では、まず、スピリチュアル・ツーリズムの序論的考察として、そもそも一般的人間の通常的生活において現在でも儀

式 (ritual) のウェイトが高いものになっていることについて、つまり、そもそも人間の一般的通常の生活ではすでにスピリチュアル性に満ちたものになっていることについて論じているドウソンの論考 (Dowson, 2019) をレビューする。同論考タイトルは「スピリチュアル的宗教的的人生行路 (journeys) における儀式の役割」である。

II. 人間生活における儀式の意義

1. 概要

ここで儀式というのは、広い意味で、“儀式的なもの”も含み、今日的な意味合いでいえば“イベント”、少なくとも当事者本人が行事や進行の中心的地位にある、もしくは主体性を持ちうるようなイベント、というのが相当なものである。ドウソンはこうした儀式的なことが、巡礼やスピリチュアル・ツーリズムにおいてだけでなく、一般的な通常の生活でも節目ごとに心の持ちようを変える方法としてかなり意義をもつものになっているというのである。

この中でもなかならず日常生活における儀式の意義については、ヴァン・ゲネップ (van Gennep, A., 1960) の提起したものを啓発的なものとして引用し (van Gennep, 1960, p. xvii, cited in Dowson, 2019, p. 10)、それを“人生行路上の儀礼” (rites of passage) とよんでいるが、それは次の3者に大別されるものである。

- ① 離別 (separation) : 最も典型的なものは人間の死去の際の葬儀であるが、例えば終了式や退任式などもこれに入る。
- ② 移動 (transition) : ある状態から他の状態への移行の際のものをいうが、例えば移転や移住の際のものなどである。実際には上記の離別、または下記の統合と同義的になる場合が多い。
- ③ 統合 (incorporation) : 結婚式、入学式、入社式、着工式などをいい、移動よりも合体に重点があるものである。

人々は、こうした場合になんらかの儀式的な行事や儀礼的行為を行い、心の切り換えを行うのであって、その際ヴァン・ゲネップは「人間がある1つの状態 (status) から他の状態に移行する際に一種の儀礼的な気持ちをもつことは、世俗的な都会的な生活がいかに盛んになっても、少なくなることはない」 (cited in Dowson, 2019, p. 10) と述べている。

これをうけてドウソンは、集約的にいえば、例えば今日の結婚式は儀式の方法や厳粛さなどの点において過去と同じものではないが、全体としては重要な儀式的もしくは儀礼的なものとなっている。少なくとも結婚当事者には大きな意義をもつもの、つまり儀式的なものとなっていることは間違いないと、書いている (Dowson, 2019, p. 10)。

以上の記述には、儀式が今日でも人生上で重要な出来事になっていることが提示されるとともに、さらにそれが、時代とともに推移し、少なくとも形の上では変化するものであることが示されている。すなわち、儀式は、少なくとも現象的な形態では変化するもの (changing rituals) であることが提議されている。

ここにドウソンの1つの主張がある。

ところで、こうした儀式には、内容的にみるといくつかの特徴的な点がある。この点は、ドウソンによると、すでにファラシ (Falassi, A., 1987) により分析が試みられているが、中でも注目されるべき点として、“見せびらかしの儀礼” (rites of conspicuous display) が挙げられている。ただしこれは、ドウソンでは、ファラシに従い、通常は一般公開されていないものが、特定の時期だけ公開されることによって、その物の価値、つまり“有り難さ”が高められることをいうものとされている (Dowson, 2019, p. 12)。

本稿筆者としては、この論述の展開では儀式もしくは儀式的なものがテーマであるから、以上のドウソンの論述には確かに一定の意義があるが、しかし人間社会における“見せびらかしの事象”の解明としては、ヴェブレンが提起し一躍知られるものとなった“見せびらかしの消費” (conspicuous consumption) について論及されることがより肝要と考える。

ヴェブレンのいう“見せびらかしの消費”は、周知のように、富裕層や特権階層などヴェブレンのいう有閑階級が、自己の社会的地位の高さを示すために、例えばわざわざ豪華な家屋に住み、超高級な衣服を着用するなどして、それを誇示し見せびらかし用に使うことなどをいう (Veblen, 1899)。

ここでは、こうした“見せびらかし”がもともと人間の階級社会にあり、それが宗教的行事やスピリチュアル・ツーリズムにおいても、すなわち人間の心のあり方、精神のあり方にかかわる、まさにそうしたものにおいて、前面にたち、重要な機能を果たすものとなっていることの意味が、つまり、スピリチュアルな面に志向するものといいつながりながら、実際には世俗的な物的なもの、すなわち世俗的な階級的の差異を表示するものになっていることの意味が、あるいはさらに、スピリチュアルな面に志向するものであるが故に、こうした“見せびらかし効果”が必須とされるゆえんが、まさに論究されている。

ドウソンに戻ると、以上の上につれて、次に、文化 (culture) の影響について論じられている (Dowson, 2019, pp. 16-17)。

2. 文化の影響

文化の影響についてドウソンは、まず「伝統的に、例えば (欧米的にはスピリチュアルな生活の中心をなす) 教会の文化 (church culture) についてみると、それは、原理的には、教会外部の影響を簡単には受けないものである」が、しかし他方において「文化的変化によって新しいグループ・アイデンティティ (a new group identity) が創り出されることがある。しかもそれには、単に教会外部で認められるだけのものではなくて、教会内部でも見えるものであったり、あるいは教会側においてなんらかの形で対応がなされることがあったり」したのになっている。ただし、少なくとも服装などは、今日ではかなり自由になっていると提議している (Dowson, 2019, p. 17)。

そこでドウソンは、総括的には、ベル (Bell, C., 2009) が (少なくとも) スピリチュアル・ツーリズムでは、儀式的なものは、社

会的なコントロールと変化の一環をなしているものであると述べているところを良しとしている (Dowson, 2019, p.17)。

その上にたってドウソンとしては、総括的に「儀式というものは、宗教的なもの（つまりスピリチュアルなもの）であるか否かを問わず、社会的もしくは宗教的な関係 (context) に即応したいとする願望に則したのか、もしくは事情のいかんによっては、自らの当該の社会的環境 (social environment) から解放される手段とみられることができるものか、のいずれかである」と規定されるものとしている。本稿筆者としては、後者の要因が大いに注目されるが、いずれも、結局、現状からの脱却が眼目となる点が肝要なことと考える。

そしてドウソンでは、宗教的もしくはスピリチュアル的な人生行路における儀式は、次の4つの要因によって変わることがありうるとされるとともに、さらにこれらの変化は、広い社会的および文化的な状況から生まれるもので、それには8つの要因があるとされている。以下では両者を併せて示してある (Dowson, 2019, pp.18-19)。

- ① (人生行路における) 儀式の4つの変化要因 (dimensions of variance in ritual)
 - i) 構造的なもの (structured) か、非構造的なもの (unstructured) か。
 - ii) 伝統的なもの (traditional) か、新しい、考案されたものか (new and invented)。
 - iii) 公式的なものか (formal) か、非公式的なものか (informal) か。
 - iv) しっかり嵌め込まれたもの (embedded) か、自由自在なもの (independent) か。
- ② 影響を与える要因 (influencing factors)
 - i) その儀式は宗教内のものか、宗教外のものか、あるいは双方に及ぶものか。
 - ii) 儀式の行われる場所 (place) とその範囲 (extent) はどのようなものか。
 - iii) 儀式の形成 (construction) と実行 (performance) の仕方はどのようなものか。
 - iv) 儀式の行われる時刻 (time) とその影響の範囲 (extent) はどのようなものか。
 - v) 儀式の行われる時間の長さ (duration) はどのようなものか。
 - vi) 儀式参加のための時間とそれから解放される時間はどのようなものか。
 - vii) 物的な (physical) 状況と地理的な (geographic) 状況はどのようなものか。
 - viii) 当該儀式の行われる文化的な (cultural) 状況はどのようなものか。

最後にドウソンは、「スピリチュアルな、すなわち宗教的な人生行路の模様を考えると、それがいかに古い伝統的な巡礼的なものであっても、従事している儀式のあり方とその意味は、その時々々の文化的な環境の違いから生じる影響により絶えず

変容する (transform) ことを余儀なくさせられるものであろう」 (Dowson, 2019, p.19) と述べ、締めくくりの言葉としている。ここにはスピリチュアル・ツーリズムも、時代の推移とともに、例えば関係者各層における余暇時間の増加、なかんずく増加の結果おきる余暇時間処理の仕方の違いなどの文化的要因により影響を受け、変化するものであることが改めて提議されている。

ドウソンの見解は以上とし、次に、スピリチュアル・ツーリズムもしくはスピリチュアル性追求の原理的問題を考察するために、スピリチュアリズムを中心にスピリチュアル・ツーリズムの重要論点について1つの見解を提示しているギユイツェルとサリイルディツ (Ayça Sariyildiz) の論考 (Güzel and Sariyildiz, 2019) を取り上げる。論考タイトルは、「スピリチュアリズムから新しいパラダイムへ：スピリチュアル・ツーリズムと動機」である。なお、ギユイツェルとサリイルディツは共にトルコ、アクデニツ大学所属である。

Ⅲ. 現代のスピリチュアリズムとスピリチュアル・ツーリズム

1. 現代のスピリチュアリズムについて

ギユイツェル／サリイルディツは、スピリチュアリズムがどのように展開されてきたものか、についての論究から始めている。かれらによると、精神陶冶主義あるいは世俗脱却主義という意味におけるスピリチュアリズムが、心理学関係で意味あるものとして注目されるようになったのはすでに12世紀のことであった。それが宗教的關係で採り容れられたのは15世紀～16世紀のことで、近代的な形のものとしては、すでに17世紀に見られるものである (以下本節は Güzel and Sariyildiz, 2019, p.41ff. による)。

現代としては「なかんずく第二次世界大戦以後盛んになったが、しかしそれがどのようなものを意味するかの定義 (definition) については、コンセンサスが得られていないものである」。というのは、それは、「内容や特性があまりにも抽象的 (abstract) で、個人ごとに異なるもの (individual) になっているからである」と書いている。

もとよりギユイツェル／サリイルディツによれば、現代のスピリチュアリズムは、一般的にいえば、現代社会生活における疎外現象、精神的孤独性、空虚性に起因する自己充足性 (self-fulfillment) の欲求から生じていると解されるものであるが、論者の中には、例えばケール (Kale, S.) のように、スピリチュアリティ (spirituality) とグローバル化 (globalization) とが相互に関係し合っているというものもある。

というのは、ケールによると、この両者は今や、政治・経済・技術などのあり方において、現代の文化的環境を決める2大要因になっているからである。この場合スピリチュアリティは、「個人の内的なものに対する深くて有意な傾倒」 (the deep and meaningful commitment to the inner self of the individual) をいうもので、これは、例えば何かを見出したり工夫したりするために熱中すること (devotion to discovery) となって現われ、現代社会にとつて実に有益な効果をもたらすものとなっている。

故に、現代の社会的活動では、一方では、スピリチュアルな活動が重要要因になると同時に、他方では、このことが社会的活動においてグローバルに活動する必要をもたらし、グローバル化を促進するものとなっている。つまり、スピリチュアリティが現代的活動のいわば質を決めているものであるのに対し、その対象範囲すなわち量的範囲を決めているものがグローバル化である、というのである (Kale, 2004, cited in Güzel and Sariyildiz, 2019, p.41)。これは、聞くべきところが大きい。

ギュイツェル／サリイルディツに戻ると、かれらは、改めて「現代のスピリチュアル・ツーリズムは、個人自身の発見 (exploration) と内的な変容 (internal transformation) の達成にある」 (Güzel and Sariyildiz, 2019, p.41) と定義し、「今日では、ネオリベラリズムや唯物論が広くゆきわたっているような所でも、スピリチュアル・ツーリズムは盛んに行われている」 (Güzel and Sariyildiz, 2019, p.42) と提議している。

この場合スピリチュアル・ツーリズムは、実際には、単にいわゆるスピリチュアルな所や事物に関連したツーリズムだけをいうのではなく、ツーリストにおける高度な自己注入 (high level of commitment) あるいは自己理解 (self-realization) といわれているものを含むのであるが、ギュイツェル／サリイルディツは、例えばホークス (Hawks, S., 1994) に言及しつつも、こうしたものが“ポストモダン時代のスピリチュアル・ツーリズム”であると規定し、そうしたものがますます増加していると論じている (Güzel and Sariyildiz, 2019, p.42)。

2. 現代のスピリチュアル・ツーリズムについて

今日の形態におけるスピリチュアル・ツーリズムというものは、ギュイツェル／サリイルディツによると、本来的には、20世紀になって余暇活動の過ごし方に関連しておきたものをいうが、21世紀になると、通常的な生活そのものにおいてスピリチュアル性を求める傾向が高まったものとして特徴づけられる。

すなわちそれは、「今日的なスピリチュアル性に強く志向するものである。ここで今日的なスピリチュアル性とは、余暇活動の多くについて人間全体にとって有益なものととらえ、それを単なる逃避的なもの (escape) と考えるのではなく、自己自身を見つめ、自己の問題性 (disagreement) がどこにあって、どのような矯正されるか (reconciliation) を見出す契機になると考えるものである。その機能は、それ故、自己発見と内的変容を求めるものであるから、広く科学的に (scientific) に究明され、創り出されるもの (creation) という特色をもつ」 (Güzel and Sariyildiz, 2019, p.43) と規定されるとする。

その際何故にツーリズムが行われるかについてみると、ギュイツェル／サリイルディツは、スピリチュアル性の追求のためには、今や「聖なる所やそれと関係あるものとしてこれまで慣れ親しんだ (accustomed to in a divine context) 所とは、別の場所で、あるいは、これまでとは異なったスピリチュアルな雰囲気のもとで、改めてスピリチュアルな体験を行い、変容を遂げるためには、

これまでとは異なった別の所に旅行することが必要」としてツーリズムが行われるものであるとする。つづけてかれらは言う。こうして「スピリチュアル・ツーリストたちは、自己を知ること (self-awareness) と生きることの意味 (sense of life) をますます自覚するようになる」 (Güzel and Sariyildiz, 2019, p.43)。

総括的にギュイツェル／サリイルディツは、スピリチュアル・ツーリズムは人間のスピリチュアルな発展と自覚に対する欲求から起きるものであり、(原理的には) 宗教というものの精神を越えるものである。たとえ表面上は、特定宗教にかかわる形をとるものであっても、そのようなものとして規定されるとしている (Güzel and Sariyildiz, 2019, p.43)。

この上にたつてギュイツェル／サリイルディツは、こうしたスピリチュアル・ツーリズムの種別としては、シャントクマリ (Shanthakumari, R.) が2017年に提示した以下のような5つの類型が有用として引用している (Shanthakumari, 2017, cited in Güzel and Sariyildiz, 2019, p.44)。

- ① 目的的精神的スピリチュアル・ツーリスト (purposeful spiritual tourist) : 旅行の主たる (main) 目的が、個人的なスピリチュアル目的の追求にあるもので、神なるもの (the divine) に接しようとする意向の強いもの。
- ② 観光偏向的精神的スピリチュアル・ツーリスト (sightseeing spiritual tourist) : 旅行の主たる目的は個人的なスピリチュアル目的の追求にあるが、しかし実際にはその旅行ではスピリチュアル経験よりも観光経験の方がウェイトの高いものをいう。
- ③ カジュアルな精神的スピリチュアル・ツーリスト (casual spiritual tourist) : スピリチュアルな目的追求がカジュアル的だけのもの。故にスピリチュアル経験に対する欲求は①、②より弱いもの。
- ④ 偶発的な精神的スピリチュアル・ツーリスト (incidental spiritual tourist) : そもそもスピリチュアルな目的追求が当該旅行の本来の目的にはなっていない、偶々その機会があった故に経験するだけのもの。
- ⑤ 特段な精神的スピリチュアル経験は全くないツーリスト (serendipitous spiritual tourist) : 旅行中に特段のスピリチュアル経験は全くないが、(例えば旅行仲間との会話などにより) なんらかのスピリチュアルな経験らしきものがあるもの。

ただし、ここで確認されるべきことは、この5つの類型化論が、後述のアクブルト／エキンによるツーリズムの5類型論と形態論的には同一傾向のものであり、5類型論としてかなりオーソドックスなものであることである。実は、本稿で既述の、宗教的ツーリズムにおける sightseeing の5段階説もこれにヒントを得ている。

それ故結論的には、ここではこのことを指摘し、ツーリズムにおけるスピリチュアル性と観光性との2大種別論は、現在のところでは、体系的には結局、5つの類型化論として展開されているものになっており、それが今日におけるツーリズム論の代表的な有力な定式の1つであることを改めて確認的提示するものである。

そこでここでは、ギュイツェル／サリイルディツ説をさらに追究し、次に、スピリチュアル・ツーリズムの動機 (motivations) についてレビューする。それは、結論を先にいえば、現代ツーリストでは、実際の動機としては、スピリチュアル性と観光性との並存性あるいは一体性の追求にあるというものである。

3. 現代におけるスピリチュアル・ツーリズムの動機

この点についてギュイツェル／サリイルディツは、まず、「スピリチュアリズムそのものについての関心は、多くの分野で高いものがある。ところがスピリチュアル・ツーリズムについてみると、それに直接かかわった研究は、今日でもごく少数 (very few) である。従ってスピリチュアリティをベースにした旅行 (travel) についての研究は、ツーリズム研究でも実に不十分である」と宣し、それ故「スピリチュアル性を求める動機は、ツーリズム研究では新しい研究テーマたるものである」と提議している (Güzel and Sariyildiz, 2019, p.46)。

そのためギュイツェル／サリイルディツは、一方では、例えば、インドのアーシュラムについて研究したシャープレー (Sharpley, R.) / スンダラム (Sundaram, P.) の論考に依拠して、そうしたインドの (スピリチュアル性に強い重点があるといわれる) いわゆる聖地を訪れるツーリストの中でも、実際には、スピリチュアリズムを焦点においたものだけではなく、“好奇心” (curiosity) や“見聞的関心” (seeing touristic places)、“ヨガの体験” (learning yoga) などを目的にしたもののあることを指摘している (Sharpley and Sundaram, 2005, cited in Güzel and Sariyildiz, 2019, p.46)。つまり、こうしたツーリズムでも、スピリチュアル性と一般的ツーリズム性との並存、あるいは統合の性向がみられるというのである。

そこで、ギュイツェル／サリイルディツは、他方ではこの場合、スピリチュアル・ツーリズムの本来の動機としては、今日でも例えば次のようなものがあると、改めて提示している。 (Güzel and Sariyildiz, 2019, p.47)。

すなわち、「スピリチュアル経験の体験」 (experience a spiritual experience)、「神秘的なもの探究」 (search of the divine)、「創造者への帰依」 (connect with the creator)、「創造の秘密の体得」 (discover the mystery of creation)、「自己の発見と統合感の体得」 (discover the self and satisfy the feeling of being at unity / one)、「究極的真理や最高価値の探求」 (the search for ultimate truth or the highest value)、「自己の発見と完成」 (discover and complete self)、「自己の認識と悟り」 (raise self-awareness and enlightenment)、「心身の調和の達成」 (provide a balance of body, mind and spirit)、「肉体的知的精神的純化」 (purify physically, mentally, spiritually)、「純化と一新」 (to be purified and renewed)、「精神的な進展」 (spiritual development)、「精神上の救いの達成」 (achieve spiritual salvation)、「生きることの意味の探求」 (search for the meaning of life)、「人生を意味あるものとする」 (make life meaningful)、「個人的な癒しと生まれ変わり」 (personal healing and transformation)、「内面的精神的ギャップの除去」 (fill the inner and spiritual gap)、「

「内面的な世界の癒し」 (heal the inner world)、「内面的な面での生まれ変わり」 (live an inner transformation)、「自然と人間との結び付きの理解」 (understand the connection between nature and humans) である。

そこでギュイツェル／サリイルディツは、以上のような現代ツーリズムにおけるスピリチュアル性の主張の上になつて、広くツーリズム全般についても、これまでのようなマーケティング戦略、すなわち、ツーリズム場所における豪華な接待やエンターテインメント、イベントなどを誘因としたようなものは、今や時代遅れのもの (outdated marketing strategies) であつて、社会の実情に合わないものになつていと主張している。

つまり、かれらが言わんとすることは、総合的に結論的には、現在社会では物事について決めるのが難しく、種々考えあえぐ人々 (individuals with undecided minds and searches) が多くなりつつあり、一般の通常のツーリズムでも、動機としては、このことが十分に考慮されるべきであるということである。

かれらは、次のように述べ、締めくくりの言葉としている。すなわち現在では、「スピリチュアルな旅行 (spiritual travel) が、今1つのツーリズムとして注目を浴びている。(スピリチュアル・ツーリズムと宗教的ツーリズムとは同義とする見解もあるが) スピリチュアリズムは、単なる1つの宗教やイデオロギーを超越し、今や個々の人間の内面に働きかける本来のもの (innate) となつている。…スピリチュアル・ツーリズムに志向するスピリチュアル・ツーリストの数は、現代生活においてネガティブな条件が強まっていることに応じて、増加しつつある」 (Güzel and Sariyildiz, 2019, p.47)。

もとよりギュイツェル／サリイルディツのこうした現代的ツーリズムの動機についての特徴づけには、反論も多いと思料される。本稿でも後述のようにメッカにおける商業化の傾向について言及しており、ギュイツェル／サリイルディツとは主旨の異なるところがある。

しかし本稿では、スピリチュアル・ツーリズムを含めたツーリズムの“スピリチュアル性”と“観光性”との二者並存性、あるいは一体性の追究という提起に留意しつつ、次に、この問題について集約的に論じている、既述で一言したアクブルト／エキンの論考について、(動機も含めて) 改めて本稿の課題に即し総括的に考察する。その論考タイトルは「トルコにおける宗教的ツーリズムのインバウンドとアウトバウンド」 (Akbulut and Ekin, 2019) である。

IV. 巡礼、宗教的ツーリズム、観光的ツーリズム

ここでアクブルト／エキンの出発点になつている考え方は、宗教とツーリズムとはもともと密接な関係があるというテーゼである。この上になつてかれらは、さしあたり「(人類の) 古い時代から、人々は様々な宗教的行為をするために、自己の居住地の近くの所だけではなく、遠く離れた聖なる場所をも訪れることをしてきたのである。…すなわち宗教は、ツーリズムの機能を果たす上で、つまり人々が (自宅とは異なった) 場所へ行くことを誘引す

る機能を果たす上で、一定の役割を果たしてきたものである」と提議している（以下本節は Akbulut and Ekin, 2019, p.164 による）。

つまり、人々が自宅から離れて、なんらかの外出あるいは遠出をする要因となったうえで、極めて大きなものはなんらかの宗教的要因であったというのである。それ故かれらによると、「宗教的ツーリズムは、ほとんど人類の始まり（dawn of humanity）からあったツーリズムの先駆的形態である。宗教関連的なデスティネーションは、すでに古代から単に文化的な背景のある所であったばかりではなく、その地域の商業の中心地であり、経済の主要部分をなす所であった」（Akbulut and Ekin, 2019, p.164）と提議される。

しかし他方で、アクブルト／エキンは、ツーリズムとの関係においても、“巡礼”、“宗教的ツーリズム”、“一般・通常のツーリズム”の3者において区別されるべきものとする。すなわち、「（一般・通常の）ツーリズムも宗教的ツーリズムも巡礼も確かに、その目的達成のためになんらかの旅行（travel）をする。しかしいうまでもなく、ツーリズムの社会的事象（social happenings）としての意義は、この3者において全く異なるものである」。

本稿筆者としてさしあたりまずここで問題となるのは、巡礼の場合である。それについてみると、アクブルト／エキンによると、巡礼は常に（continuously）この世の限界（boundary）を超越しよう（transcend）とする。単に個々の人間がもつ限界だけではなく、例えば時間そのもの（time itself）という限界を超越しようとするものである。また巡礼は、宗教的ツーリズムよりも古いものであり、歴史の書かれていない時からあったものである。故に、巡礼でも旅行をするが、そのかわり方や程度が異なる、というのである。

そこで総括的に旅行もしくはツーリズムの形態の観点からすると、既述で一言したように、それは“巡礼”、“宗教的ツーリズム”、“一般的通常のツーリズム”の3者に大別されるものであるが、それぞれには中間形態があるから、まとめていえば、図2のような形で表わされるという（Akbulut and Ekin, 2019, p.165）。

種別	巡礼		宗教的ツーリズム		通常のツーリズム
程度	A	B	C	D	E
注	（聖的なもの）		（知識ベースなもの）		（世俗的なもの）

注：“A=聖的な性大”→“E=世俗的な性大”。

出所：Akbulut and Ekin, 2019, p.165

図2：ツーリズム形態の位置づけ。

これで見ると、人間の旅行は、世俗性すなわち観光性の強弱からすると、それがほとんどないものから、観光性の圧倒的に強いものまで5つの程度のものに分かれる。こうした5つの類型に分けること自体は、既述のように、シャントクマリ（Shanthakumari, 2017）ですでに提起されている。また、ドウソン／ヤクブ／ライの編書（Dowson, Yaqub and Rai (eds.), 2019）でもギュイツェル／サリイルディツにより論述されている。

しかしここで紹介したアクブルト／エキンのそれは、それらを

さらに発展させ、巡礼、宗教的ツーリズム、通常の観光的ツーリズムに拡大し、位置づけたものという意義がある。これは、スピリチュアル性を立脚点にした現代ツーリズムの体系的な類型として高く評価できるものと考えられる。スピリチュアル・ツーリズムを中心にしたツーリズム類型論は、今やこの試みで1つの到達点に達したと史料される。

すなわちスピリチュアル・ツーリズム論は、今や、この類型論に關説することなしには論じられない地平にあると史料される。というのは巡礼も、もとより旅行（travel）の1つの形であるから、旅行は、スピリチュアル性と観光性を両軸として、“巡礼——宗教的ツーリズム——通常の観光旅行”という連続的關係のもとに位置づけられることになるからである。ここに、本稿としてもさしあたりの1つの集約点がある。

この上において本稿では次に、本稿テーマの展開部分として、まず、ツーリズムのイスラム教的考え方と欧米的な考え方を対比的にとらえ、中でもアメリカの代表的論者であるマキャネル（Dean MacCannell）について論究しているアルゼンチン、パレモ大学のコルスタンイエ（Maximiliano E. Korstanje）の所説を取り上げる。その論考のタイトルは「ツーリズムのイスラム的動機およびアメリカ的伝統の矛盾」（Korstanje, 2019）である。

V. 欧米的ツーリズム観の論評

1. ツーリズムの規定

コルスタンイエの出発点になっているものは、「イスラム教とキリスト教とは数世紀にわたり平和的に共存してきた。ところが欧米メディアによって、イスラム教は欧米文明に敵対するところの、非妥協的で、耐えることを知らない宗教として、貶置的に（pejorative）に扱われてきた。実に不幸なことである」。故にイスラム教的ツーリズムの本性（nature）を明らかにし、アメリカに代表される欧米的ツーリズム観の問題点を解明することが必要であると表明する（以下本節は Korstanje, 2019, p.32ff. による）。

そこで、ツーリズム論としてまず序論的に確認されるべきこととして、次のような点があるという。すなわち、イスラム教的ツーリズムがすでに古代、例えばアッシリア人時代やローマ王朝時代に始まっていたのに対し、欧米の見解によると（いわゆる現代的ツーリズムという断わりの上ではあるが一本稿筆者注）ツーリズムは何よりも産業革命を契機として、資本主義体制の台頭とともに生まれたと規定されるものになっていることである。

そしてこのこと、すなわち現代ツーリズムは産業革命を契機として生まれたものであるという認識は、欧米の有力なツーリズム論者、例えばマキャネル（MacCannell, 1999）、コーヘン（Cohen, 1984）、アーリ（Urry, 1992）、ミーサン（Meethan, 2001）らにおいて当然のこととして前提とされているものである、という。

これに対し、イスラム教的ツーリズム論では、何よりもツーリズムは産業革命を契機とするというようなものではないとするが、このことは、イスラム教的文化立脚論者だけではなく、欧米的論者の中でも例えばスイスのツーリズム論者、クリッペンデル

フ (Krippendorf, 2010) 等により認められているものであると宣している (Korstanje, 2019, pp.32-33)

このことは、いうまでもなく、ツーリズムとは何か、すなわちどのようなことをもってツーリズムというかによって決まるものであるが、コルスタンイエはまさにこの点を問題にせんとするのであり、結論を先に示せば、コルスタンイエは、要するに、ツーリズムは、本来、人間を生き変えらせ (regenerate)、社会的力 (social force) として増強を図るものである。少なくともイスラム教的ツーリズムでは、そうしたものとして、古代より今日まで存在し続けてきたものである。故に、多くの、しかも主要な欧米論者のように、産業革命を契機として進展した現代的な資本主義的なツーリズム、すなわち余暇の楽しい過ごし方に志向しただけものをいうようなものでは全くない。そうした欧米的な考えは根本的に誤りである、というのである。

しかもコルスタンイエは、そうした欧米的ツーリズム論が世界的に妥当なものとして広く浸透しているのは、まさに欧米諸国主体の植民地主義的な世界戦略展開の有力な一環をなすものであって、大いに批判されるべきものであるというのである。かれは「ヨーロッパ民族中心主義 (European ethnocentrism) は、当初から、ヨーロッパ諸国による (他国の) 植民地化を正当化すること、従って現地人 (native) たちをいわゆる文明化することを目指したものであった。…このことのために、旅行記などで現地人を貶めるように描くことが平気でなされてきた。…そしてこうした世界観が、世界を我が物と考えるダブル・スタンダードを作り上げてきた」 (Korstanje, 2019, p.33) と論じている。

さらに今日でも、こうした欧米的世界観にたった「欧米的文化の使者 (ambassadors) として欧米文化の魅惑をもたらすものとして旅行するものが、欧米のツーリストであり」、これに呼応してアカデミックな論者たちも、ツーリズムは産業革命に始まるものであって、例えばそれで実現した交通手段の現代化は、まさにこうした技術進歩によって可能になったものであることを吹聴するものである、と論じている。

コルスタンイエによると、「これらの論者たちは、古代におけるツーリズム状況を研究することなどが決してなく、中世のツーリズム事情 (例えばザ・グランドツアーなど) についても部分的に (partly) 関心をもつだけで終わっている」。例えば当時は、旅行すること (travelling) は貴族など特権階級に限られたものであることなどは、大書されることがない。ましてやアメリカについていえば、ネイティブな人たちが、少なくともそこに土着するまでに旅行をしてきたはずであることなどは、「“アングロ・サクソン・ツーリズム論” (Anglo-Saxon tourism) では、全く無視されている」と批判している (Korstanje, 2019, p.33)。

それにとどまらずコルスタンイエは、さらに、「われわれがイスラム教的ツーリズムの概念 (term) の見地をとり、それからみるときには、欧米の博学な論者たちにより独自のものとして提示されているツーリズムの多くの考えは、少なくともイデオロギー的には (ideologically)、イスラム世界から借りているもの (borrowed)

か、あるいは、それと結局は合一するもの (introduced) ばかりである」 (Korstanje, 2019, p.33) とさえ宣している。

その上でコルスタンイエの考えによれば、ツーリズムは、一言でいえば、“人生上の儀礼” (rites of passage)、つまり、人間が精神的に通常の日常生活から離れて新しい状態に生まれ変わる (revitalized) ときなどにおける儀式 (ritual) というべきものと規定される。これは、本稿で既述のドーソンの主張に収斂するものであり、ここでは、これ以上の論究は行わないが、コルスタンイエは、ツーリズムには本来、通常生活よりも多くの儀式性があり、ツーリズムと宗教性は密接に関連している。ところが、そうした観点が皆無とっていいものがある。その代表的なものが、現代アメリカの考えにたつものであり、それについて批判する必要があるとする (Korstanje, 2019, p.33)。

ただし、現代アメリカの論者の中でも、マキャネルは異なる独自の考え方にたつもので、例外的存在である。結論を先にいえば、マキャネルは、もともと以上のような現代アメリカ的な行き方に疑問を提起しているものである。故にマキャネルは一種の矛盾的、葛藤的な立場にたつ。このことは大いに評価する必要があると、コルスタンイエは主張する。

2. マキャネルの葛藤的な立場

ここでコルスタンイエが主として対象としているものは、マキャネルの著書というべき『ツーリスト：有閑階級の新しい理論』 (MacCannell, 1999) である。コルスタンイエはまず、この書の方法論的土台をなすものとして、大別的には、構造主義、なかんずくレヴィ=ストラウスのハイパーモバイル (hyper-mobile) 論と、ヴェブレンの制度理論的な考え方があるとし、その上にたつてコルスタンイエは、マキャネル説の土台にはマルクス主義の見解があるとして、次のように書いている。ここでは当該個所全文を示してある。

「デーブ・マキャネルは、周知のように、マルクス主義的理論 (Marxist) と唯物史観 (the materialist conception of history) の影響をうけているものである。それは一言でいえば、この世は、要するに、弱肉強食の世界という考えにたつものである。財の保有者は物神崇拝性 (fetish) によってのみ動機づけられるが、それによって資本所有者は物財の交換 (販売) によって主要な利潤を獲得し、それ以上働くことは不要になる。マキャネルは、確かにマルクスほど急進的ではなかったが、ツーリストについて、次のように考えていた。すなわちツーリストたちは、もともとは労働者たち (workers) であって、働いているときには資本所有者により搾取され (exploited)、利潤追求の源になってきた者たちであると想定していた。物財の交換過程でも資本所有者には売価とコストの違いにより追加的な利潤追求の機会がある。それに基づいて労働者たちの貧困と抑圧は、物の生産に必然的な過程として永続する。こうした現行システムによって、資本所有者は特権集団として生産手段 (means of production) を独占的に所有することができるだけでは

なく、法律上の処理命令権 (legal jurisprudence) をもつものとなる」(Korstanje, 2019, p.35)。

コルスタンイエは、以上のように、マキャーネル説について土台をなすものはマルクス主義的見解であるとするともに、さらにそれが、ゴフマン (Goffman, E.) の“演出された本物性” (staged authenticity) の主張に立脚したものであることを注視し、次のように書いている。

「演出された本物性”は、一般市民と社会制度との間を仲介するものであるが、それはまさに世俗化 (secularization) の過程でわれわれの信仰心を揺らぐようにさせることをめざすものである。世俗化された社会は、科学やその他の現代的手段を駆使して歴史的に形成されてきたものであるが、それはまさにアノミー (anomie: 社会的無秩序状態) を生むことのある病的状態 (pathologies) を招来するかもしれないものである」(Korstanje, 2019, p.35)。

以上をまとめてコルスタンイエは、アメリカ社会の全般的な行き方をみると、特に近年では、デジタル技術の一層の進展もあって、ツーリズム思想では、ツーリストをとにかく喜ばせればいいという考えが強まり、倫理思想はますます弱くなっているが、実は、この点についてマキャーネルは、心よく思っていないものなのである。例えばマキャーネルの2011年の書では、次のように述べられていることを紹介し、ここには、少なくとも直近におけるマキャーネル説の真髓が示されているとしている。

「今や、この世界にはツーリスト誘因物として想定されないような場所、文化的地帯、地理的特性地域はどこにもない。つまりこの世界は、道徳的規準 (moral terms) で規制されたものではなくなっている」(MacCannell, 2011, cited in Korstanje, 2019, p.35)。

換言すると、コルスタンイエのみるところ、現代アメリカにはツーリズムの考え方について2つの流れがある。1つは、ツーリズムをもってレジャー産業のますますの享楽産業化を目指す方向で、いわばツーリズムを含めて資本主義的享楽産業化の盛況に志向するものである。今1つは、そうした方向に対しとてかく非賛同的な (reluctant) もので、その意味では批判的なものである。

コルスタンイエによると、マキャーネルは、後者の代表的な論者とみられるが、マキャーネルは、本来、“崇高なる未開拓性” (noble savage) は、これを保護し保存すべきことを主張する“ネオ・ロマン主義的伝統主義” (neo-romantic tradition) に立場にたつもので、これはフランス哲学に由来すると措定されるものである (Korstanje, 2019, p.36)。

この上にとつてコルスタンイエは、中東地帯を中心としたイスラム教的ツーリズムの現状について論じた上で、結論として次のように述べている (Korstanje, 2019, p.39)。

「われわれは、ツーリズムを全く現代の活動として、すなわち、古代の先進的な国や王朝などでは決して想像もつかなかった活動として考える危険を良く承知しておかなくてはならない。こうした点を無視することは、ラテン学者や考古学者が体系的

に収集している大量の証拠や記録などと矛盾することである。中東地帯におけるツーリズムの発展についての理論的成果は、古代のツーリズムの概念と一致するものである。すなわちそれによって (古代や中世の) 神権的な (theocratic) 文化や宗教をベースにした慣習などは、ツーリズムと両立するものであるという考えが有効であることを立証しているのである」(Korstanje, 2019, p.39: カッコ内は本稿筆者のもの、他も同様)。

しかしこれは、本稿筆者のみるところ、少なくとも今日のツーリズム事業論としては、一種の規範論というべきものではないかと考える。というのは、今日では、ツーリズムのいわば顧客であるツーリストについてみると、そして何よりもツーリズム業務の運営者である人々についてみると、一言でいえば、資本主義的な関係の中で、端的にいえば、そうした中でのみ生活し、生存できるものであるから、少なくともツーリズム事業の運営ではこうした点が前提にされなくてはならないからである。

今日では、例えば純粹の宗教的団体でも、当該団体で (電気やガス等の用役調達を含めて) 完全な自給自足的運営がなされていない限りにおいては、その生存、活動のための物資の取得について、なんらかの資本主義的企業と関係を持ち、資本主義的な関係に巻き込まれたものとなることを回避できない。ましてやこうした教団の取引相手であるいわゆるツーリズム企業は、物資の仕入などにおいて資本主義的な関係の中で資本主義的に活動し、生存を行っているものであるから、資本主義的な存続・進展を前提にせざるを得ない。すなわち商業化の進展である。これが資本主義を含む社会体制の鉄の宿命である。

この点は、例えば多くの宗教的ツーリズム・デスティネーションにおいて“商業化” (commercialization) の進展として論じられている問題である。本稿でもさらに展開的部分として、次にこれを考察する。取り上げるのは、メッカ巡礼の今日の状況について、巡礼の側からこれについて論じている、前記で一言したヤクブによる論考「ハジの例年の巡礼の旅に参加する巡礼の動機」(Yaqub, 2019)、および、近年におけるメッカのいわゆる現代の変貌の側から論じている、クラシの論考「聖なるメッカとメディナに見る、聖的イベントの商業化にともなう、宗教的文化的ヘリテイジの減少」(Qurashi, 2019) である。ただし本稿は、最近におけるメッカの商業化傾向の進展に限定したものである。

VI. メッカ巡礼のあり方をめぐって

1. メッカ巡礼の今日的状況

ヤクブ論文およびクラシ論文によると、メッカ巡礼、すなわち「ハジ」(Haji) の達成のための巡礼は、4千年以上以前から行われてきたものであって、現在ではそれは、世界最大の巡礼行事といていいものである (Yaqub, 2019, p.22)。メッカとメディナを訪れる巡礼は、年平均約1千2百万人、2012年で見るとメッカのみで巡礼は約3百万人強、巡礼たちの支出は

約160万USDドルであったが、2025年には1千7百万USDドルになると見込まれている (Qurashi, 2019, p.85)。

しかしそうした巡礼たちの動機をみると、既述で一言したように、結論を先にしていえば、「巡礼から（一般的通常の観光的）ツーリストへの変化が進んでいる」(Yaqub, 2019, p.21)といわれるものである。そこには、端的には、現代化 (modernization)、そして商業化の傾向が顕著にみられる (Yaqub, 2019, pp.21,30)。

まず、メッカ巡礼の費用についてみると、概ね2018年で見ると、サウジアラビア政府登録の旅行業者提供の諸費用込みのメッカ巡礼ツアー料金は、旅行期間の長さや宿泊費用、航空運賃などにおける違いがあるが、平均的には、3,250英ポンドから6,000英ポンドであったといわれる (Yaqub, 2019, p.26)。

ヤクブが、ティモスイ (Timothy, D.) / オルセン (Olsen, D.) からの引用として紹介しているところによると、「主だったイスラム諸国では政府や、時によると国際機関が、なんらかの形で旅行費用を支援している場合があり、…テレビやラジオの番組でメッカ行き旅行パッケージを賞品として提供しているものもある」(Timothy and Olsen, 2006, cited in Yaqub, 2019, p.22) といわれる。

もっともティモスイ / オルセンによると、サウジアラビアはじめイスラム諸国の政府では、メッカ巡礼が単なるツーリズム誘因 (tourist attraction) とみられることには断固として反対という立場をとっているが、アズイツ (Aziz, H.) は、実際にはそれは、まさに“通常ツーリズムといわれるもの”の基準 (general tourism traits) に合致しているものである。というのは、そうした通常のツーリズム基準は次の2条件をいうものであるが、メッカ巡礼もこれにあてはまるからである、と提議している (Aziz, 2001, cited in Yaqub, 2019, p.25)。

- ① ツーリズム業務に関与する企業や個人において、提供した用役や労役の代償として、巡礼すなわちツーリストから、然るべき生活上、事業運営上の費用、つまり所得を得ているものである (businesses and individuals earn a living from the pilgrims)。
- ② 巡礼にはガイド (guides) が付き、それが宿泊、食事、交通の世話をするものである。

さらに、巡礼の旅行のための施設や設備も近年では近代化が進められている。例えば、次のような状況にある (Yaqub, 2019, p.25)。以前のようないわゆる“巡礼=苦行”というようなことは妥当性がないものになっているというのである。

- ① メッカでは遺跡に行く交通手段はエアコンの効いたものになっている。
- ② 宿泊はテントではなく、きっちりしたホテルになっている。
- ③ 観光 (sightseeing) やショッピングも巡礼コースの不可欠の部分となっている。

ちなみに、2011年にテイラー (Taylor, J.) は、「メッカは金持ち (the rich) のものになった。イスラムの最も神聖な場所は、『ベガス』(Vegas) に化していった」(Taylor, 2011) と題する一文を書き、そこでは「昔は、埃っぽい砂漠の中の1つの町であっ

たものが、今や摩天楼のような高層ビル、ショッピングモール、高級ホテルが立ち並ぶ現代的大都市として近隣を睥睨するものになっている」(Taylor, 2011, cited in Yaqub, 2019, p.25) と評している。

もっともヤクブは、一方では、これは偏に「サウジアラビア政府が、この最も聖なる地を、この国のショーケースにしようとしている」からである。こうしたメッカのいわゆる“メッカ・ベガス”化には強い反対論があるとしつつも、他方では、「これほど多くの巡礼たちを一時に収容せねばならない事情もある。現代の旅行者に適合した然るべき宿泊・食事・交通等の用役提供が必要とされることも否定できないことである」(Yaqub, 2019, p.25) と論じている。

さらにヤクブは、メッカを中心にした巡礼の受け容れの問題では、巡礼たちの安全をどのように確保するかが重大課題になっていると指摘している。ヤクブによると、巡礼が被害者になった殺人事件は、1987年以降増加傾向にある。近年ではイラクとの関係悪化もあり、その被害者がいずれ2000人以上になるのは間違いないとヤクブは予測している (Yaqub, 2019, pp.25-26)。

以上の上になつてヤクブは、巡礼、なかんずくメッカ巡礼には“魔法のような引き付ける力” (magnetic pull of pilgrimage) があることは間違いないが、交通手段の近代化などによって旅行しやすさが向上していることも、近年におけるメッカ巡礼の高まりに役立っていることが認められねばならないと述べ (yaqub, 2019, p.30)、結びの言葉としている。次にクラシ論文を中心にメッカ側の動きを管見する。

2. メッカにおける商業化の進展

クラシによると、イスラム教巡礼の主都であるメッカは、「なかんずく1985年以降聖地としては破壊された (demolished) ものになった。宗教的文化的遺跡の多くが、その犠牲になっている。…故に次のような問題が提起されざるを得ない」とする。すなわち、メッカとメディナにおいて宗教的文化的遺跡を破壊させるよう動いているものは、何か、そしてその根源はどこにあるか、という問題である (Qurashi, 2019, p.85)。

これと同様な問題提起は、サウジアラビアの著名な建築家、アンガウイも行っているといわれる。すなわち「これは、メッカの本性 (nature) と神の家 (the House of God) の神聖性に対する絶対的な冒瀆である。メッカもメディナも、今や歴史的な意義をほとんど全部失った。摩天楼のようなものを除いて、何もない所になってしまった」(cited in Qurashi, 2019, p.85)。

ここで摩天楼のような高層ビルといわれているものの代表的なものに、例えば“Makkah Royal Clock Tower Hotel”がある。同ホテルは2010年開業で、ロンドンのビッグベンよりも大きく、601メートルの高さがあり、昼間では25キロメートル先からも見えるものである。30本のレーダーがあり、夜間には2.2メガワットの電力を用い、30キロメートル先でも見える光線を出す (Qurashi, 2019, p.89) による。クラシによると、こうしたいわゆる商

業的建築物のため、「メッカの千年以上にわたり維持されてきた建築物の95%が破壊され、犠牲になった」(Qurashi, 2019, p.89)。

もとより、こうしたこと、なかんずく“Makkah Royal Clock Tower Hotel”の建築は、計画当初から種々論議をよんだものである。建築当事者は、これはイスラム教寺院にある尖塔、ミナレットを象徴するものであるとともに、パリのエッフェル塔やロンドンのビックベンに対抗するものであると主張してきた。しかし他方において、その大きさや華美さはイスラム教の神髄に合致したのではなく、“メッカ・ベガス”(Makka Vegas)を作り出すものであるという反対意見もかなり強いものであった。

クラシの論考には、“Makkah Royal Clock Tower Hotel”の“夜間のレーダーを放射している堂々たる姿”を示す写真が掲載されているだけでなく、2016年時点で写された、メッカ中心部における著名なホテル建築工事現場を示す道標も掲げられている。そこには“Marriott”、“Hilton”、“Hyatt”、“Conrad”の名前がある(Qurashi, 2019, pp.90-91)。このうち例えばメッカ・ヒルトン・ホテルはすでに2014年に開業している。当時が“メッカ・ベガス”化の時期であったことが示されている。

クラシは、「イスラム的ヘリテージ研究財団」(the Islamic Heritage Research Foundation)の専門家、アル・アラウィ(Infan Al-Alawi)によると、マホメットの生誕家といわれるものも移転する計画があるといわれ、「メッカという聖なる都市は、行政と多国籍企業により、今や利潤を生み出す場所に変容させられている」(Qurashi, 2019, p.93)と嘆じている。

もとより本稿は、こうした傾向について善悪の判断を主張するものでは毛頭ない。本稿は、メッカにもみられる以上のようないわゆる宗教的ツーリズム・デスティネーションの商業化は、今日におけるツーリズムの資本主義化の動向として、時代の必然的方向として、これを事実として注視せざるを得ないと考えるとともに、こうした傾向は、当然ながら、宗教性、スピリチュアル性ととの適度な共存性が求められると強く考えるものである。宗教性・スピリチュアル性と資本主義的経営性との共存は不可能とは考えずに、両者共存のあり方を模索するのが、今日における宗教的ツーリズムすなわちスピリチュアル・ツーリズムの、つまり今日における資本主義的な、というよりは現代的な宗教的もしくはスピリチュアル・ツーリズムの最大の、かつ、喫緊の課題と考えるものである。

クラシも最後に次のように書いている。「以上においてこの論考で論究しているものは、確かに主として、商業化と、それに対応する部署の指導によって、宗教的文化的ヘリテージが危機にあるということであるが、…しかし、メッカやメディナなど聖なる都市において、(ここでは直接的には訪れる信徒をできる限り多くの受け容れることに起因する)経済成長と、宗教的歴史的サイトの保護・保全との間でバランスを図る必要があることは否定できない」(Qurashi, 2019, p.94)。

Ⅶ. おわりに—現代的な“超越的欲求志向的ツーリズム”の進展を

以上本稿では、宗教的もしくはスピリチュアル・ツーリズムについて近年の主要な論調について考察し、現代では巡礼を含めて、こうしたスピリチュアル志向的なツーリズムにおいて、観光志向的ツーリズムへの傾向がみられることを指摘してきた。ここでは、こうした傾向をふまえて、“観光欲求を充たすことを含めて今日の条件に合ったところの、巡礼を含めて、スピリチュアル志向的なツーリズム”をまとめて、“精神志向的ツーリズム”というものとするが、これについては、さらに次の2点を提議しておきたい。

第1点は、今日では資本主義的体制のさらなる高度化により、生産力が一層進展し、社会全体的には余暇部分が増加し、余暇活動の充実化がますます緊急の社会的課題になることに応じて、ツーリズム欲求は量的にも、かつ質的にもますます向上することが必然的ということである。これは、多言を要しないものと考えられる。

その際、“質的にも”向上することについて一言しておきたい。これが第2点である。この場合“質的にも”ということには、本稿筆者のみるところ、2面ある。第1にツーリズムの内容が、例えば宿泊ホテルの高級化など、いわゆる“贅沢化”あるいは“近代化”という意味において高度化することである。しかしそれと同時に第2に、種々な形で、精神志向性の欲求が向上することである。つまり、資本主義的体制のますますの進展により、人々の精神的安定あるいは精神的向上を求める欲求はますます強まり、その充足を行うためにツーリズムに出たいとするという傾向は、ますます強まるがあっても、弱まることはない、と考えられる。ただしその場合、それは観光欲求も同時に然るべく形で充足するものであることが必要と考える。

この点に関連して強く注目されることは、今日における人間欲求のとらえ方について、“自己実現欲求”を中心にした欲求階層説の提唱者として名高いマズロー(Maslow, A.H.)が、1970年に、旧来の欲求階層5段階説に代えて、欲求階層説は8段階という、“欲求階層8段階説”を提起していることである。これは下記のような8段階をいうものである。これによると、今や“超越的欲求”が、単なる自己レベルにとどまる“自己実現欲求”に代わって、最高次の欲求になっている。下記は、低階層から8段階全体を示したものである(ただしMcLead, 2020による)。

- ⑧ 生物的・生理的欲求 (biological & physiological)、
- ⑦ 安全 (safety) の欲求、
- ⑥ 愛と所属 (love & belongingness) の欲求、
- ⑤ 尊厳 (esteem) の欲求、
- ④ 認識的 (cognitive) 欲求、
- ③ 美的なもの (aesthetic) の欲求、
- ② 自己実現 (self-actualization) の欲求、
- ① 超越的 (transcendence) 欲求。(超越的欲求とは、これまでの

自己を超越することをいい、例えば他人の自己実現を支援することなどをいう。

このようにマズローは、今日において、人間欲求のさらなる高度化として、“超越的欲求”を提起している。ツーリズムでもこれに応えるものであることが必須とされる。これによれば、今日では、上記で提起した“精神志向的ツーリズム”というレベルに留まることはできず、それを超え、超越的欲求に志向したものであることを必要とする。

つまり現在求められているものは、“超越的欲求志向的ツーリズム”というべきものである。それは、一言でいえば、今日の条件に合ったところの、観光欲求を十分に充たしつつ、他人の自己実現をも支援するものである。こうしたツーリズムの実現、充実が今日における時代的要請であると考えられる。ただしここでは、このことを提起するだけで終わり、その展開は後日の課題とする。

(参考文献)

- Akbulut, O. and Ekin, Y. (2019), Inbound and outbound religious tourism in Turkey, in: Dowson, R., Yaqub, M.J. and Raj, R. (eds.), *Spiritual and religious tourism: Motivation and management*, Wallingford: CABI, pp.163-173.
- Aziz, H. (2001), The Journey: An overview of tourism and travel in the Arab Islamic world context, *Tourism and the Less Developed World: Issues and Case Studies*, vol.4, pp.11-16.
- Bell, C. (2009), *Ritual theory, ritual practice*, Oxford University Press.
- Cohen, E. (1984), The sociology of tourism: Approaches, issues, and findings, *Annual Review of Sociology*, vol.10, pp.373-392.
- Dowson, R., Rai, R. and Yaqub, J. (2019), Introduction to spiritual and religious journeys, in: Dowson, R., Yaqub, M.J. and Raj, R. (eds.), *Spiritual and religious tourism: Motivation and management*, Wallingford: CABI, pp.1-8.
- Dowson, R., Yaqub, M.J. and Raj, R. (eds.) (2019), *Spiritual and religious tourism: Motivation and management*, Wallingford: CABI.
- Dowson, R., (2019), The role of ritual in sacred journeys, in: Dowson, R., Yaqub, M.J. and Raj, R. (eds.), *Spiritual and religious tourism: Motivation and management*, Wallingford: CAB, pp.9-20.
- Falassi, A. (1987), Festival: Definition and morphology, in: Falassi, A. (ed.), *Time out of time: Essays on the festival*, University of New Mexico Press, pp.1-10.
- Goffman, E. (1959), *The Presentation of self in everyday life*, New York: Anchor Books.
- Güzel, Ö., Şahin, İ. and Yetimoğlu, S. (2019), Managing the physical environment of the sacred tourist destination. in: Dowson, R., Yaqub, M.J. and Raj, R. (eds.) (2019), *Spiritual and religious tourism: Motivation and management*, Wallingford: CABI, pp.92-108.
- Güzel, Ö. and Sariyıldız, A. (2019), From spiritualism to a new paradigm in tourism: Spiritual tourism and motivations, in: Dowson, R., Yaqub, M.J. and Raj, R. (eds.), *Spiritual and religious tourism: Motivation and management*, Wallingford: CABI, pp.41-50.
- Hawks, S. (1994), Spiritual health: Definition and theory, *Wellness Perspectives*, vol.10, pp. 3-13.
- Idris, J. (2019), Spiritual motivation for religious tourism destinations, in: Dowson, R., Yaqub, M.J. and Raj, R. (eds.), *Spiritual and religious tourism: Motivation and management*, Wallingford: CABI, pp.59-72.
- Kale, S. (2004), Spirituality, religion, and globalization, *Journal of Macro Marketing*, vol.24, pp.92-107.
- Korstanje, M.E. (2019), Islamic motivation for tourism and contradictions of the American tradition, in: Dowson, R., Yaqub, M.J. and Raj, R. (eds.), *Spiritual and religious tourism: Motivation and management*, Wallingford: CABI, pp.32-40.
- Krippendorf, J. (2010), *Holiday makers*, London: Routledge.
- Kurumanaliyeva, A., Rysbekova, S., Duissenbayeva, A. and Izmailov, I. (2014), Religious tourism as a socio-cultural phenomenon of the present, *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, vol.143, pp.958-963.
- MacCannell, D. (1999), *The tourist: A new theory of the leisure class*, University of California Press. (安村克己／須藤廣／高橋雄一郎／堀野正人／遠藤英樹／寺岡伸悟訳『ザ・ツーリスト』学文社)
- (2011), *The ethics of sightseeing*, University of California Press.
- McLead, S. (2020), Maslow's hierarchy of needs, retrieved April 10, 2020, from: www.simplypsychology.org/maslow.html
- Meethan, K. (2001), *Tourism in global society: Place, culture, consumption*, New York: Palgrave.
- Qurashi, J. (2019), Diminishing religious cultural heritage of holly Makkah and Medina due to commercialization of the sacred event, in: Dowson, R., Yaqub, M.J. and Raj, R. (eds.), *Spiritual and religious tourism: Motivation and management*, Wallingford: CABI, pp.85-96.
- Shanthakumari, R. (2017), Challenges and opportunities of spiritual tourism in India, *International Journal of Applied Research*, vol.3, pp. 737-748.
- Sharpley, R. and Sundaram, P. (2005), Tourism: A sacred journey? The case of Ashram tourism, India, *International Journal of Tourism Research*, vol.7, pp.161-171.
- Sumption, J. (1975), *Pilgrimage*, London: Faber and Faber.
- Taylor, J. (2011), Mecca for the rich: Islam's holiest site 'turning into Vegas', *The Independent*, available at: <http://www.independent.co.uk/news/world/middle-east/mecca-for-the-rich-Islams-holiest-sites-turning-into-vegas-2360114.htm>.
- Timothy, D. and Olsen, D. (eds.) (2006), *Tourism, religion, and spiritual journeys*, London: Routledge.
- Urry, J. (1992), *The tourist gaze*: London: Sage. (加太宏邦訳『観光のまなざし』法政大学出版局)
- van Gennep, A. (1960), *The rites of passage*, trans. University of Chicago Press.
- Veblen, T.B. (1899), *The theory of leisure class: An economic study in the evolution of institutions*, New York. (小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波文庫)
- Yaqub, M.J. (2019), Motivation of the pilgrim to attend the annual pilgrimage of Haji, in: Dowson, R., Yaqub, M.J. and Raj, R. (eds.), *Spiritual and religious tourism: Motivation and management*, Wallingford: CABI, pp.21-31.
- Zuelow, E.G.E. (2016), *A history of modern tourism*, London: Palgrave.
- 大橋昭一 (2021) 「ツーリズム理論研究の若干の原理的諸事項—方法的若干問題ならびに代表的理論類型等を中心に—」『和歌山大学・観光学』24号(観光フォーラム)、85-94頁

受理日 2023年5月15日